風土記

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉第112号　令和３年(2021)６月30日

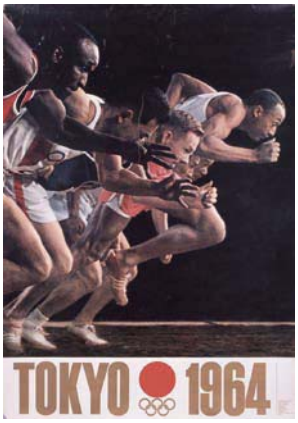
資料見聞

1964年東京オリンピックポスター

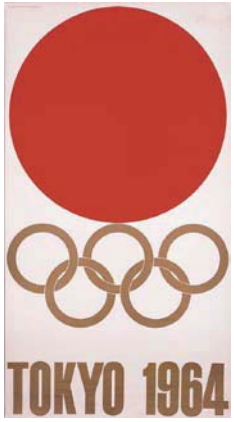
石畑　匡基

４号

３号



２号



１号

東京オリンピックポスター１～４号（高松市歴史資料館蔵）

昭和39年（1964）10月10日から24日までの15日間にわたり、アジアにおける初のオリンピック、東京オリンピックが開催されました。今回紹介するのは、その東京オリンピックの公式ポスターです。どれも縦は１メートルを超えており、実物を見ると大変迫力があります。

さて、上の４枚全てのデザインには亀倉雄策（かめくらゆうさく）（1915～97）というデザイナーが関わっています。その経緯について説明していきましょう。

昭和35年（1960）２月に東京オリンピック大会組織委員会は現在のオリンピックエンブレムに当たるシンボル・マークを決定するため、「デザイン懇談会」を立ち上げます。そこで、シンボル・マークのコンペを行うことを決定しますが、発表予定の期日まで４ヶ月しかなかったため、公募ではない「指名コンペ」としました。指名されたデザイナーは、亀倉を含む６名で、１人ずつデザインを提案しました。最後に提案することになった亀倉は陸上競技トラックをモチーフにした第１案を提案しましたが、審査員の反応は良くありません。そこで、赤い丸と金の五輪マークと文字で構成した第２案を提案しました。すると、満場一致でこの第２案が採用されました。それが、写真の１号ポスターです。１号ポスターは10万枚が配布されました。なお、１号ポスターは印刷物として国内外の注目を集め、イタリアのミラノ・デザイン賞などを受賞しました。

その後も亀倉がデザインに関与したポスターの作成が続けられます。昭和37年５月にはスタートラインを切るランナーをモデルとした２号ポスターが発表され、９万枚が配布されます。これは、オリンピック史上初の写真を使用した公式ポスターとなりました。翌年４月には水泳選手をモデルとした３号ポスター７万枚が、開催直前となる昭和39年４月には聖火ランナーをモデルにした４号ポスターが発表され、５万枚が作成されました。躍動感あふれるこれらのポスターはそれまでのどのオリンピック公式ポスターよりも見る人の心を打ちました。

この1964年東京大会は、オリンピックの公式ポスターのデザインが飛躍的に向上する転換点となったと評価されています。それまでの「告知」のためのポスターから、「美しい・すごい」と思わせるアーティスティックな存在へと転換させた大きな画期となったのです（参考文献：昭和館展示図録『日本のオリンピック・パラリンピック』（2019年））。

開館30周年記念

企画展　土佐人 山本忠興（ただおき）と近代オリンピック

会期：令和3年7月16日（金）～9月5日（日）

石畑　匡基

昨年開催予定であった東京オリンピックは新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響により、本年7月23日開幕へと延期されました。

日本にとって、開催予定の年にオリンピックが開けなかったのは2度目のことです。最初は、昭和15年（1940）に開催予定であったものの、昭和12年（1937）に勃発した日中戦争の影響により返上し、幻となりました。その幻のオリンピック招致に関わっていたのが、高知県出身の電気工学者である山本忠興でした。開館30周年記念企画展の第二弾となる「土佐人　山本忠興と近代オリンピック」開展に先立ち、彼の功績を少しだけ紹介したいと思います。

●高知時代の山本忠興

山本忠興は、明治14年（1881）に現在の南国市において誕生しました。父（養父）は、のちに県議会議員や貴族院議員をつとめた山本忠秀です。

忠興は、明治26年（1893）に県尋常中学校に進学し首席で卒業します。その後身に当たる高知県立高知追手前高等学校には、忠興の入学願書が残されています（写真1）。

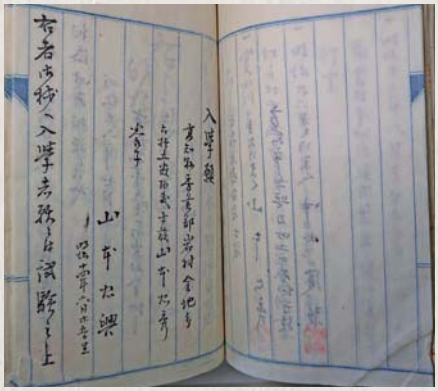


写真1「明治二六年入学志願書」
（高知県立高知追手前高等学校蔵）

卒業後は、第一高等学校（東京大学教養課程の前身）を経て東京帝国大学電気工学科（現在の東大工学部）に入学しました。

●電気工学者として

在学中から日本初となる鉄道の電化工事に従事し、明治38年（1905）に卒業すると、芝浦製作所（現在の東芝）に入社しました。

明治42年（1909）には、ドイツやアメリカに留学し、最新の電気工学を学びました。このときに英語力や世界に広がる幅広い人脈を作り上げたのでしょう。

帰国後、早稲田大学理工科（のちの理工学部）に迎えられます。大正元年（1912）には教授となり、昭和19年（1944）には名誉教授になります。この間、多くの発明を世に送り出しており、国内・国外問わず多数の特許が残されています（写真2）。

特に力を注いだのが、テレビジョン（テレビ）の研究です（写真3）。共同開発によって「早大（早稲田）式テレビジョン」の開発に成功し、昭和5年（1930）には、世界初の公開実験を行いました（写真4）。約150㎝四方のスクリーンに鮮明な映像を映し出し、人々を驚かせました。さらには、野球場から世界初の屋外実況中継を成功させるなど、その技術力は世界でもトップレベルのものでした。その後、アメリカで発明されたブラウン管方式のテレビが主流になりましたが「テレビジョン開発の父」として、その名が残されています。

写真2「特許証」
（早稲田大学大学史資料センター蔵）

写真4「テレヴィジョン公開実験記念券」
（早稲田大学大学史資料センター蔵）

写真3「実験を行う山本忠興」
（早稲田大学大学史資料センター蔵）

このような数々の功績が認められ、昭和5年には「日本の十大発明家」に選ばれました。

●「日本陸上の育ての親」

このように発明家としての輝かしい功績とともに、日本スポーツ界にも多大な影響を与えました。

自身もスポーツマンとして、剣道やボート、野球と幅広く活躍しました。早稲田大学では、大正6年（1917）に、競走部部長（監督）に就任し、四

半世紀にわたって選手の育成にたずさわりました。

特に、大正13年（1924）には第8回パリオリンピックを視察し、日本のスポーツ界の現状を把握し、選手の育成に情熱を燃やしました。

また、昭和2年（1927）には日本学生陸上競技連合会の初代会長になり、翌年に開催された第9回アムステルダムオリンピック日本選手団の総監督に就任しました。

忠興は、オリンピックに合わせて、早大選手の海外遠征を企画します。そこで、鍛えられた教え子の織田幹雄（三段跳び）が、オリンピックでは日本人初となる金メダルを獲得しました（写真5）。

写真5「織田幹雄と山本忠興」
（右から南部忠平・山本忠興・織田幹雄）
（早稲田大学大学史資料センター蔵）

選手達にも慕われていたことを示す忠興宛ての手紙や寄せ書きが今でも残っています（写真6）。

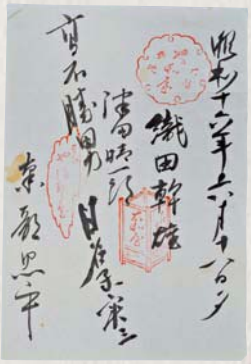


写真6「寄せ書き」
（早稲田大学大学史資料センター蔵）

続く、第10回ロサンゼルスオリンピックでは陸上競技監督をつとめるなど、日本における近代オリンピックの歴史を語る上で欠かすことのできない人物といえるでしょう。

また、「友情のメダル」（写真7）で知られる西田修平も早稲田大学出身で、忠興の教え子の一人です。彼は、第11回ベルリンオリンピック陸上競技棒高跳びに出場し、慶応大学出身の大江季雄と同記録であったため2・3位を分け合い、お互いの銀と銅のメダルを半分に切断してつなぎ合わせ「友情のメダル」を作成しました。

写真7「友情のメダル」
（早稲田大学大学史資料センター蔵）展示期間：8月13日（金）から9月5日（日）

●1940年東京オリンピック招致へ

オリンピックにおける日本人選手の度重なる活躍によって、日本でもオリンピックを開催しようという機運が高まります。

忠興は、昭和4年（1929）に来日した国際陸上競技連盟会長のジークフリード・エドストレ（ロ）ームと会談し、東京でのオリンピック開催の可能性について意見を交わしました。

さらに翌年には、当時の東京市長である永田秀次郎と忠興が東京オリンピック開催の可能性について会見を行ったことで、昭和15年（1940）に開催される第12回大会を東京に招致するための活動が本格的に始まります。

忠興は、欧米に留学した際に身につけた語学力を活かし、招致活動に貢献しました。ついに、昭和11年（1936）7月31日に開催された国際オリンピック委員会の総会で、東京でのオリンピック開催が正式に決定しました。これを機に国内ではさらにオリンピック熱が高まり、大会プログラムや関連グッズが各地で作られました（写真8・9）。

しかしながら、昭和12年（1937）から始まった日中戦争の激化により、翌年7月15日に日本は東京オリンピックの返上を決定したのです。

●「高知県スポーツの殿堂」入りへ

山本忠興は、日本でのオリンピック開催を見ることなく、昭和26年（1951）4月21日に死去します。

第9回オリンピック日本選手団総監督などの功績を記念して平成11年（1999）には「高知県スポーツの殿堂」に入り、顕彰されています。また、本年は忠興の生誕140年、没後70年の節目の年でもあります。もう一度、彼の功績について知っていただく機会になれば幸いです。

写真8「HAND BALL」
（当館蔵）

写真9「着物」（昭和館蔵）

予告

開館30周年記念

企画展「田辺寿男の民俗写真5 ―春夏秋冬 としの祭り―」に向けて

会期：令和3年10月8日(金)～12月5日(日)

中村　淳子

田辺寿男氏（1921～2010）は、高知県の民俗を調査研究し、写真に記録した民俗写真家です。当館は、田辺氏の写真資料を約5万点収蔵しており、今秋、同氏の写真展第5弾を開催します。

昨年から今年にかけては、田辺氏の写真展が県内でふたつ開催されました。いずれも同氏が調査し撮影した市町村であり、被写体になった方やご縁のある方がご覧になって楽しまれたとお聞きしました。それぞれの展示に協力した当館としても、ありがたい限りです。

ひとつは、香南市の絵金蔵15周年記念企画として開催された「田辺寿男没後10年写真展　追憶の赤岡　絵金の町」（会期：令和2年6月2日～11月29日）です。田辺氏は、神祭に並べられた芝居絵屏風など昭和40～50年代の赤岡町の様子を活写していました。

もうひとつは、芸西村筒井美術館で、「高知城歴史博物館・地域記録集完成記念展　土佐の村々・芸西久重地区編」と同時に開催された「田辺寿男民俗写真展　ぼくの村は山をおりた・芸西久重地区」（会期：令和3年2月14日～5月9日）です。

絵金蔵の展示には当館から画像データを15点提供しましたが、その際に平成30年度から導入した資料情報管理システムが役立ちました。同システムによるデータベースに田辺氏の写真資料情報も約2万件登録していたためです。ただし、同氏の写真資料を網羅するまでには至っていませんし、件数は多いものの画像が未登録の資料も多く、1件ごとの情報が薄い状態です。

そこで質量ともに充実させることが課題ですが、展示することによっても新たな情報を得られます。絵金蔵と芸西村筒井美術館からは、それぞれ有意義な情報をご提供いただいたので、データベースに反映させつつあります。

芸西村筒井美術館には写真パネルを23枚貸し出しました。平成11年度の当館企画展「ぼくの村は山をおりた」の田辺氏のオリジナルプリントです。紙焼きの作品は味わい深く、なかには全倍（90㎝×60㎝）の大きなパネルもあり、迫力がありました。

それらを当館で焼き付けた際、暗室では狭くてできず、普段は撮影に使う写場を暗くして使っていただきました。覆い焼きや焼き込みのテクニックを駆使する同氏の勇姿が思い出されます。

当館で開催する田辺氏の写真展については次号で詳しくご紹介しますが、同氏が調査し撮影した年中行事や祭りの写真をとりあげます。

田辺氏が、レンズを通して見つめた高知県の暮らしの歳時記を、ぜひご覧ください。

正月　佐賀町（現 黒潮町）昭和42年

節分　安芸市上尾川　昭和51年

虫送り　土佐市岩戸　昭和55年

秋祭り　室戸市椎名　昭和58年

盆棚模型が完成しました！

梅野　光興

令和2年度に高知県の盆棚模型を製作しました。

盆棚とは、お盆の時に霊をまつる祭壇の一種です。当館では平成7年（1995）の企画展「死と再生の文化」のために県内の盆行事や盆棚について調査しました。盆棚といっても地域によって違いがあります。まず、まつる対象ですが、全ての祖先の霊をまつる所、初盆の霊だけまつる所、祖霊についてきた餓鬼をまつる所などがあります。作る場所も、仏壇の前、縁側、軒下、庭、川の中とさまざまです。形や素材も、棚に上がるハシゴがあるもの、モロブタを利用したもの、栗や柿をつるすもの、芭蕉の葉を敷くものなどバリエーションが豊かです。県中東部では水棚とも呼ばれ、4本の竹を柱にして、高さ1mぐらいの所に棚を設け、ヒノキの葉で覆います。

平成5年（1993）に当館の立地する岡豊町八幡で水棚作りを見ることができました。薄くへいだ竹で作った「×」模様や、緑鮮やかなお堂のような屋根のたたずまいに目を見張りました。私の見た限り、県内の盆棚では一、二を争う手の込んだものです。ぜひ県民の皆さんにも見て欲しいと、展示用に本物の素材で製作を頼み、期待通りの盆棚が完成しました。ところが、燻蒸（くんじょう）すると、みずみずしい緑色が茶色になってしまい、がっかりしたのを思い出します。

それから25年。その盆棚は、ヒノキの葉がちょっと触るとぼろぼろ落ちるぐらいに劣化しました。このままではいずれ無くなってしまいます。ということで、合成樹脂のヒノキの葉や竹を使って、模型を作ることにしました。

依頼したのは京都市の「スタジオ三十三」という文化財の複製や模型を作る会社です。模造のヒノキの葉や竹を使って、本物そっくりに組み上げて頂きました。「×」模様の竹も模造の竹で作ってもらいましたが、本物は薄緑色だったのが、模造の竹なので鮮やかな緑色です。新作はやめて古い竹を再利用することにしました。そんなやりとりを経て盆棚は完成。早速4月29日の再オープンから3階総合展示室にお目見えしています。

盆棚は地域によって形が異なるので、それぞれの模型を作って展示できたら、というのが私の夢です。

新しく作られた模型の盆棚（2021年）

民家の庭に作られた盆棚（1993年）南国市岡豊町八幡

本棚

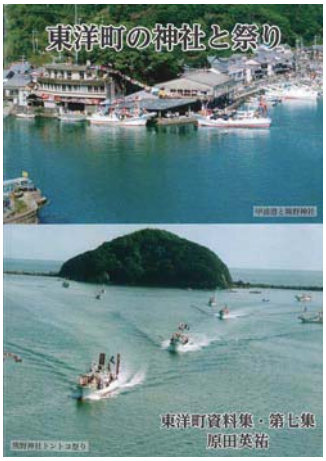
東洋町の神社と祭り

原田　英祐 著

東洋町在住の郷土史家・原田英祐氏による「東洋町資料集」の第七集で、東洋町内の神社や祭りの資料を集めた一冊です。原田氏は平成16年（2004）の「歴史年表」を皮切りに「野根山街道」「土佐日記」「方言」などの資料集を出版されています。令和2年（2020）には本書の刊行や文化財保護に尽力してこられたことが評価され、第41回平尾学術奨励賞を受賞されました。当館でも資料調査員として民俗調査などにご協力頂いています。

本書は、B5版403ページに、神社や祭りの文献資料や調査写真がぎっしり集められています。まずは、既存の資料を徹底的に集めるという調査研究の基本の重要性を改めて実感します。阿波文化と土佐文化が混じり合う東洋町の文化も興味深いです。

（梅野）



コーナー展　軍医がみた日清・日露戦争

会期：令和3年8月1日(日)～10月17日(日)　石畑　匡基

明治・大正期の小説家として有名な森鴎外（おうがい）が日本陸軍の軍医に任官し、明治27年（１８９４）日清戦争、明治37年（１９０４）日露戦争に従軍していたことは意外と知られていません。鴎外は、明治40年（１９０７）には陸軍軍医総監となっています。軍医とは、軍隊のなかで医療行為を担う医師の資格を持った軍人で、戦場で傷を負った兵士の手当や衛生管理に当たる衛生兵とは異なり、医師の資格が必須となります。

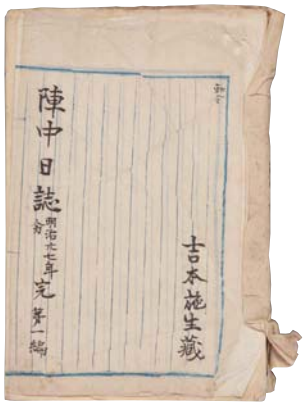
軍医の歴史は、明治維新後、近代的な軍隊の創設とともに始まりました。最前線で戦闘に参加するのではなく、後方において傷病者の支援に当たる重要な任務を担いました。

今回のコーナー展では、森鴎外と同じ時期に活躍した高知県出身の軍医である吉本其葉（そのは）に関係する資料について紹介します。

吉本其葉は、安政4年（１８５７）に現在の南国市浜改田に生まれました。明治9年（１８７６）に高知で医学修行を始め、医師の資格を得ました。同17年には東京に遊学したいと一念発起し、上京。そこで、陸軍軍医講習生募集を目にして、志願しました。翌年には合格し、軍医の道を歩みます。平時は陸軍病院に勤務しながら、徴兵検査の立ち会いなどの業務に従事しました。

日清・日露戦争が始まると、動員されて中国などに駐屯（ちゅうとん）し、軍医として活躍し、無事帰国しました。

そしてその後も軍医として多くの人々に関わり、大正7年（１９１８）6月14日にこの世を去ります。彼は軍医の仕事を解明する手がかりとなる貴重な資料を多く残してくれています。今回は、日清・日露戦争の従軍日誌のほか、吉本其葉へ宛てられた任命状など、明治期の軍医に関係する資料を初公開します。



陣中日誌 明治27年分
（個人蔵）

れきみん！サマーミュージアム
～あつまれ!!発明家のたまごたち～

7月31日(土)・8月13日(金)・29日(日)　西山　浩生

ずいぶん早い梅雨の訪れに、もう？と思ったことでしたが、梅雨が明ければ待ちに待った夏休みもすぐそこ。今年の歴民館は開館30周年記念の年です。子どもたちはもちろん、ご家族でお楽しみいただけるさまざまなプログラムをご用意していますので、その一部を紹介します。

まず、毎年好評の「クイズに挑戦」。夏の企画展と合わせ、コーナー展も並行して開催しますので、クイズを通して新たな発見が続々。加えて、謎解きゲームがパワーアップして再登場。こちらもぜひチャレンジしてみては（要予約）。学芸員によるミュージアムトークも各日とも午前・午後に実施しますので、お聞き逃しなく。

そして、夏休みの宿題のお役に立てるよう、今年も県立高知東工業高校の生徒さんがモノづくり体験をお手伝いしてくれます。ご家族での参加も大歓迎。現在、楽しいプログラムを準備中です（要予約）。また、今回は高知みらい科学館の協力により出張教室を開催します。モノづくりに加え、科学の不思議も体験してみませんか。

来館いただいたお子さんには、水てっぽう、竹とんぼのプレゼントもご用意（数量限定）。もしかしたら、そこから新しいタイプを発明することがあるかも。

さらに、夏休みの期間中は「教えて！学芸員」を随時受け付けます。「博物館のウラ側ってどんなの？」「長宗我部氏のことを詳しく教えてほしい」など、聞いてみたいこと、知りたいことがあれば学芸員が丁寧に対応しますので、ぜひご利用ください。

その他、当日のお楽しみメニューも。この夏も、歴民でお待ちしています。

昨年のモノづくり体験の様子

寄託作品がアニメ映画に登場

那須　望

当館に寄託されている河田小龍が描いた「龍虎図」が、7月公開予定のアニメーション映画に登場することになりました。映画のタイトルは「竜とそばかすの姫」。「時をかける少女」「おおかみこどもの雨と雪」などの作品で知られる細田守監督の最新作です。今回の物語は高知県の村に住む女子高生が主人公ということで、知っている場所も出てくるかも知れません。「龍虎図」がどのように出るかは見てのお楽しみですが、当館では7月16日から9月13日まで「龍虎図」を特別展示いたします。ぜひ本物も見に来て下さいね！

龍虎図（龍部分のみ）国清寺蔵

新任のご挨拶

館長　田中 宏治

この4月から館長を務めさせていただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

当館では、原始・古代から現代に至るまでの各時代の特徴的事象を取り上げた総合展示や、岡豊城の城主であった長宗我部氏について詳しく紹介する展示も行っています。

また、周辺の岡豊山では、四季折々の自然を感じながら憩いの時を過ごしていただけます。

今年、令和3年（2021）は、開館30周年という節目の年となります。

新型コロナウィルス感染症の状況は予断を許さないところですが、引き続き、様々な企画展も開催しながら、郷土の魅力を身近に感じていただけるよう取り組んでまいります。

皆様のご来館をお待ちしております。

岡豊山でひとひねり。岡豊山投句箱 発表

岡豊山の春を楽しむ方法のひとつ、「吟行（ぎんこう）のススメ」。初めての試みでしたが、5月13日（木）締め切りで59句集まりました。土佐國分寺の林廣裕長老に選んでいただきましたので句評とともに発表します。

廣　裕　選

花散るやひとひらづつの日の欠片（かけら）　竹内とし子

桜を愛でる心は、平安の昔から私たち日本人の風習・文化です。咲いてから散り敷くまで、全てに心を寄せ愛でる。掲句は、散る桜に心引かれた作者が、その一片一片が日を受けて散る様子を、日の欠片と捉えた。散る桜には殊に心引かれるものがある。

つはものの夢埋もるる花の山　竹内とし子

春になると岡豊山は登り口から山上に至るまで桜が彩り花の山と化す桜の名所。戦国時代に大きな夢を描き活躍した長宗我部の領主や家臣達。曽（かつ）て在った城の建物も無くなり、今は全山を静かに咲き満つる桜がつつむ。過去と現在を対比し、目の前の景色を、巧みに余韻深いものにした。

古民家の煤の匂や初夏の風　野村里史

屋外展示資料として建っている岡豊山の古民家と思われるが、それにとらわれなくても良い。昔の家は、その一と間に囲炉裏を切り、暖を取り煮炊きをした。その家に入ると、ふと染み着いた煤が匂う。それを払う様に開けた窓から風が入って来る。その風により、古民家をつつむ木々の緑などの周囲の景色が一気に広がる。

見霽（みはる）かす黒潮遥か陽炎（かげろ）へる　以　登

陽炎は、晴れた日に蒸気で空気が乱れ、ゆらゆらと向こうの景色が揺らめいて見える現象。

岡豊山々頂から一望する香長平野。その向こうの土佐湾から水平線まで、大きな自然の風景を十七文字に切り取り描いた。広がって行く情景が良い。

落城の遺構をつなぐ花吹雪　以　登

頂上に戦国武将長宗我部元親の居城・岡豊城があった岡豊山。城址の一角に歴史民俗資料館が建ち、今は歴史公園として整備されている。遺構を巡る小径に舞う落花。美しい桜の華やかさと儚さに、長宗我部氏の栄枯盛衰の歴史が重なって見える。

次回 企画展

開館30周年記念企画展

田辺寿男の民俗写真5
―春夏秋冬　としの祭り―

10月8日(金)～12月5日(日)

七夕　昭和51年　安芸市上尾川

田辺寿男氏（1921～2010）は、高知県の民俗を調査研究し、写真に記録した民俗写真家です。当館は同氏の写真資料を所蔵し、平成11年（1999）の「ぼくの村は山をおりた」を皮切りに「過疎」や「人生儀礼」などのさまざまなテーマで同氏の写真展を開催してきました。5回目の今回は季節の移り変わりのなかで営まれてきた年中行事や暮らしの写真を取り上げます。

開館30周年記念企画展

土佐人 山本忠興と近代オリンピック

7月16日(金)～
9月5日(日) 会期中無休

高知県南国市出身の山本忠興は、1940年オリンピックの招致活動に関わった人物で、早稲田大学競走部監督として多くのオリンピアンを育成しました。本展では、彼の知られざる功績を掘り起こすとともに、日本における近代オリンピックの歴史をひもときます。

企画展関連催し

●**講演会**
「山本忠興とオリンピック」
8月14日(土) 14:00～15:30
講師：島根大学准教授　浜田　幸絵　氏

●**ミュージアムトーク**（担当者による展示解説）
7月31日(土)・8月13日(金)・29日(日) 14:00～14:30
※企画展関連催しは、全て観覧券要。
講演会は要申込（電話・メール・FAX）、先着50名。

研究紀要
高知県立歴史民俗資料館研究紀要第25号

石畑匡基　研究ノート「山内忠義発給文書目録稿」
石畑匡基　史料紹介「高知県立歴史民俗資料館所蔵山内忠義発給文書について」
A4判600円（送料310円）

コーナー展

軍医がみた日清・日露戦争
8月1日(日) ～10月17日(日)

近代戦争である日清・日露戦争に従軍した高知県出身の軍医・吉本其葉（その は）。彼が記した従軍日誌などの貴重な資料を初公開します。

臨時休館のお知らせ
令和3年7月1日(木)
館内清掃作業のため休館します。

れきみん！サマーミュージアム
7月31日(土)・8月13日(金)・8月29日(日)

「クイズに挑戦」（プレゼントあり）やプラバン作り、高校生がレクチャーするモノづくり体験など、ご家族でお楽しみいただけます。ご来館いただき、楽しいひとときをお過ごしください。

開館30周年記念特別講演会

長宗我部氏から見た戦国時代
9月20日(月・祝) 14:00～16:00

講師：平井上総（かずさ）氏（藤女子大学准教授）
要予約　先着50名

岡豊風日（おこうふうじつ）　第112号
令和3年6月30日
編集・発行　（公財）高知県文化財団
高知県立歴史民俗資料館
〒783－0044　南国市岡豊町八幡1099－1
TEL　088(862)2211
FAX　088(862)2110
開館時間　午前9時～午後5時
休館日　年末年始12月27日～1月1日
令和3年7月1日臨時休館
観覧料　（通常展）大人（18才以上）470円　団体（20名以上）370円
（企画展）通常展込520円　団体（20名以上）420円
無料：高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）
印刷・川北印刷株式会社
https://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、展示および関連イベントは中止・内容を変更する場合があります。